

# Values of `Things Out There' in Early Childhood Education and Care : An Interpretation of Affordance Theory as Natural Realism

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-01-31 キーワード (Ja): キーワード (En): affordance theory, natural realism, environment, experiential world, value 作成者: YAMAMOTO, Issei メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/3904">https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/3904</a>

BY-NC-ND

# 保育における「そこにあるもの」の価値 —アフォードンス理論の自然实在論的解釈を通して—

児童学部 児童学科 山本 一成

**要旨：**本論文は、保育者と子どもが経験世界を共有することが可能であるかという問いについて、自然实在論に基づく哲学から応えていこうとするものである。实在論の哲学と実践との関係は、知覚の問題に焦点を当てることで結ばれることとなる。本論では、ギブソンのアフォードンス理論を自然实在論的に解釈することで、私たちが「そこにあるもの」に直接知覚するリアリティが、協働的に確認されるプロセスにあることについて論じる。私たちは「そこにあるもの」の实在を共有しつつ、異なる仕方ですべてを経験している。共通の实在を手掛かりに異なる経験世界を共有していくことで、お互いの理解と変容が生じることとなる。以上の議論から、環境の意味と価値は共有可能である一方、多様で汲みつくせないことが導かれる。結論として、保育者は、子どもがそれぞれの仕方ですべて知覚するアフォードンスに注意を向けることによって、子どもの経験世界を探求することが可能になることについて論じる。

**キーワード：**アフォードンス理論、自然实在論、環境、経験世界、価値

## 1. 子どもの経験世界の理解

保育において、子どもが経験している世界を理解することは、実践の核となる重要な営みである。そして、その理解が簡単なものでないところに保育の奥深さがあるように思われる。津守が述べるように、「子どもにとって意味のある世界は、生活の片隅のように見える小さな時間と空間のなかにある。」<sup>1</sup>のであり、子どもの世界は、大人の視点からは気づかれにくいかたちで存在している<sup>1</sup>。そして、子どもがもつ世界はそれぞれが異なる価値を持っているのであって、保育者は自分自身の枠組みでそれを規定することなく、ありのままに理解していく必要がある<sup>2</sup>。

では、保育者が経験する世界と子どもが経験する世界に差異があるという問題に私たちはどのように向き合っていけばよいのだろうか。保育者と子どもとの間に経験する世界の差異が存在するのは当然のことであり、むしろ差異があるからこそ教育的な営みが可能になるという考え方がありうる。しかし、一方でその差異の存在によって、保育者が子どもと世界を共有することは不可能であるという帰結が導かれるのであれば、それは子ども理解にある意味での限界を提示するものである。私たちは他者と「共通のリアリティ (common reality)」をもつことができるのかという哲学的考察は、保育における人間関係の基層を問い直し、新たな角度から実践の理解をもたらす可能性がある。

以上の問題を論じるにあたり本論が手がかりとするのが、アメリカの哲学者、ヒラリー・パトナムの自然实在論 (natural realism)<sup>3</sup>と、同じくアメリカの生態心理学者、ジェームス・ギブソンのアフォードンス理論<sup>4</sup>である。パトナムはプラグマティズムに基づくウィリアム・ジェームズの実在論を再評価し、「私たちは实在の多様なアスペクトを知覚している」という立場から経験と实在との実際的な関係について考察した。パトナムが批判する間接知覚論に基づく認識論は、私たちが経験する世界を脳の内部で構成されたものであるととらえ、結果的に私たちが共有可能な世界を消失させる危機をもたらせた。これに対し、パトナムの立場は、私たちが外部世界のアスペクトを直接に知覚し、それが真であることを探求することを通して、「共通の实在 (common reality)」に接近することができるというものであった<sup>5</sup>。

このようなパトナムの立場は、同じくウィリアム・ジェームズの影響を受けたギブソンの知覚理論と共通する部分を持っている。より具体的な生活のなかでの知覚—行為を問題とするギブソンの心理学理論を实在 (reality) との関係から読み解くことで、保育という具体的営みと实在の探求との接続点を探っていく。

以下では、まずパトナムの自然实在論について概説し、経験と实在との関係について考察する。次に、ギブソンのアフォードンス知覚が「そこにあるもの」の

価値を多様な仕方でも実現する（realize）行為であることについて論じ、環境の価値を探求することが、共通の实在／リアリティへの通路であることを論じる。最後に以上の議論を再び保育の文脈から読み解き、子どもの経験世界を理解する営みについて考察する。

## 2. パトナムの自然实在論

### 2.1 实在論の二律背反

『心・身体・世界』は、パトナムが自然实在論を主張し、自らがそれまで採ってきた形而上学的立場を転回させた著作である。本書のなかでパトナムは、かつて自身が擁護してきた形而上学的实在論と、それを批判する反实在論的立場の双方の問題点を指摘している。パトナムによれば、脱構築に代表される反实在論の立場は、共通の外部世界の存在を、伝統的形而上学の副産物である「訂正不可能性」<sup>6</sup>への回帰であるとして否定するものである。一方、共通の世界の消失を危惧する实在論者は、形而上学的な同一性や絶対性の把握といった神秘的概念を作り上げることで、私たちと世界との関係を確保しようとしてきた。これらの二極化による対立は、それぞれの立場の、部分的には優れた洞察を失わせるものであり、私たちは極から極へと退却するのではなく、实在に対して責任ある仕方でも知識を主張する方法を探し求めるべきだというのがパトナムの主張である<sup>7</sup>。これらの論争が映し出すのは、思想や言語が实在に接していることへの懐疑が、解決不能な二律背反の様相を伴って現れているということなのである。

パトナムによれば、このような二律背反は、知覚の直接的な対象が心的なものであり、私たちの認知能力と外部世界との間には両者を媒介する「境界面」がなければならぬとする間接知覚論に根をもっている。このような立場に基づけば、私たちが世界を知るためには、有機体の環境と私たちの認識とをつなぐ「表象」が必要とされる。そして、私たちの認識が成功しているかどうかを判断するためには、表象と外部の対象との因果関係を分析することが求められる。实在論においてこのような立場が前提とされた場合、言語は私たちと世界とをつなぐ媒介物として捉えられる。そして、パトナムによればこのような形で言語を捉えた場合、私たちの言語は認知の領域内部に閉じ込められ、その指示するところについての意味解釈を固定することができない。すなわち、言語が外部世界の何を客観的に指示するのかが、全面的に定まらなくなるのである<sup>8</sup>。

「どのようにして、言語は世界につながとめられて

いるか」という争点は、「どのようにして、知覚は世界につながとめられているか」という問題と通底している<sup>9</sup>。間接知覚論の立場は感覚経験を、私たちと世界とを結ぶ中間項であると考えている。私たちの知覚は感覚の解釈によって生じるものであり、私たちは外部世界の表象を解釈することを通して世界を知っているのである。私たちは知覚入力の外側にあるものを直接経験することはできない。したがって、このような立場に基づけば、私たちの世界は内的につくられるということになり、私たちの共通の世界、共通の实在とのつながりは消失する。そして、自己と世界をつなぐ「媒介物」の正体をめぐって、出口のない議論が続いていくのである<sup>10</sup>。

### 2.2 「共通の实在」への信念

間接知覚論のモデルを前提とする限り、实在論の二律背反を解決することは不可能である。そこでパトナムが再評価するのが、ウィリアム・ジェームズの自然实在論の立場である。

自然实在論者は、知覚の対象が「外部にある事物（external things）」そのものであると主張する。つまり、「外部にある事物」（キャベツであれ、王様であれ）は、心の内部に主観的に映し出されるだけでなく、直接に経験されているのだと主張するのである<sup>11</sup>。

しかし、私たちが外部の事物を直接に経験するという主張は、「素朴实在論（naïve realism）」として近現代の多くの認識論者から否定されてきた立場と類似している。素朴实在論を論駁する代表的な戦略は、デカルトが夢についての議論で行ったように、“知覚の対象となっている事実が存在することの裏付けがなくても「視覚経験」が存在する”ということを示証するというものであった<sup>12</sup>。たとえば、十分に鮮明で真に迫った夢を見ている場合、それが心がつくりだした幻であるのか、物理的な事物の知覚であるのかを判断することが難しくなる。素朴实在論の批判者たちは、以上のことから私たちが夢を見ている際に知覚しているのは心的なセンス・データであり、対象を直接に知覚しているのではないと結論づけるのである。

パトナムはジェームズの自然实在論を擁護するにあたり、オースティンの『知覚の言語』における反論を取り上げる。オースティンは、素朴实在論に反対する論者が、「夢を見ている人は何かを知覚している」という根拠のない仮定を前提としていることを批判した。そこには、意識が成立するために、「いかなる物理的な対象も知覚されていないのであれば何か別種の対象

が知覚されていなければならない」という前提と、「物理的な対象でないものは心的な対象である」という前提が組み込まれている。オースティンとジェームズが主張するのは、もし夢や錯覚が非物理的なものの知覚であり、本当の経験とそっくりであったとしても、そのことから本当の経験の場合まで、その経験の対象が事物それ自体ではありえないと結論づけることは不可能であるというものであった<sup>13</sup>。素朴实在論は、夢や幻と現実の区別について十分な説明を与えるものではないが、その一方で素朴实在論に対する反論も、私たちと事物との直接の接触を否定するに足るものではない。

ジェームズが外的な事物それ自体の知覚を擁護する背景には、私たちが共通の实在を知覚可能だとする信念がある<sup>14</sup>。知覚にセンス・データ説を導入する場合、知覚の対象は観念の内部にのみ存在するものとなり、私が知覚する対象と、別の人の知覚する対象とは互いの結びつきをもたないということに帰結する。つまり、街を散歩している場合を考えてみれば、私の精神と、他の人の精神は、まったく別の、異なった街を目にしているということになるのである。このような立場は、「冷たく」、「不自然な」ものであり、信じられるものではない、とジェームズは述べる。ジェームズが間接知覚論を拒否するのは、「自分の精神が他の人々と共通の何らかの対象に出あっている」という前提を取らなければ、「あなたの精神が存在することを想定する」ことができなくなってしまうからである<sup>15</sup>。

たとえば、あなたが一本の綱の端をもち、私がもう一本の綱の端をもち、お互いに引っ張りあう場合、綱はお互いの行為の対象になっている。私が綱を引っ張れば、あなたにとっての綱は変化するし、私にとっての綱が変化するということである。同様に、あなたが綱を引っ張ることで、私の対象も変化する。このような素朴な現実のなかでは、「あなたの精神」が存在し、「私の対象」に影響を与えているという想定と、私たちを包む世界が存在しているという想定は、ともにリアルなものである<sup>16</sup>。

一方、間接知覚論は、綱を脳のなかの表象として説明することで、共有された世界を消失させる。しかし、お互いが影響を与え合う対象のリアリティを無視して、そのような表象的世界を想定することにどのような実際の意味があるだろうか。間接知覚論の懐疑主義は、私たちが共有する「そこにあるもののリアリティ (reality out there)」を失わせ、私と同じく内的な生を持つ「あなた」の实在を失わせる。そのような種類

の懐疑を導入し、私たちの生を「独我論の寄り合い所帯」<sup>17</sup>とすることは不必要であり、理解不能なものである<sup>18</sup>。

### 2.3 リアリティの確証

ここまで議論してきたように、自然实在論は、経験される対象それ自体がリアルなものであり、共有可能なものであるという立場をとる。しかし、このような立場は、素朴实在論と同じく経験された夢や幻ですらも真の实在として位置づけてしまうことで、私たちが現実と白昼夢の区別のつかない世界に生きていることを指し示すことになってしまうのではないだろうか。

自然实在論が素朴实在論と異なるのは、共有されている实在を、同一で変化することのない実体としてとらえるのではないという点である。自然实在論がとるのは、私たちは「外部にある实在 (reality out there)」の“アспект”を感覚しているのだという立場である<sup>19</sup>。たとえそのアспектが部分的なリアリティであるにせよ、感覚や思考、言語が实在に関係する仕方を見定めていくことで、私たちは真の实在に近づいていくことができる。

ジェームズは、このことを「真理の可塑性」に基づいて主張している。私たちが真理を主張するとき、それは实在と結びついている<sup>20</sup>。私たちは「そこにあるもの」そのものを知覚し、そのリアリティを真理として主張する。その意味で私たちは真理の創造作用因であるが、それは恣意的に真理や实在を創造できることを意味するのではない。私たちが出会う实在は、私たち自身がつくりだしたものではなく、むしろ实在によって私たちの言語形態や生活形態は制約されている。そして、实在の世界のなかで私たちの言語や生活形態が発展するに伴い、私たちは实在についての自分の考えと、終わることなく交渉を繰り返していかなければならない<sup>21</sup>。私たちが言語を用いて实在を記述することは、「自らが創造に力を貸した真理を記録する」<sup>22</sup>ことであり、記録された真理に対して責任を負っていくことを意味しているのである。そのような意味で、真理は生活のなかで問いなおされていくものなのである。

このような観点からすると、实在を不変の実体として捉えることはできない。「实在が直接に知覚されるならば、それは訂正不可能な形で知覚される」という仮定自体が間違っているのであり、实在は直接に知覚されると同時に、訂正されていくものとして捉えられる<sup>23</sup>。私たちは、世界のリアリティの一部を経験し、記録し、共有する。経験が多様な文脈との関係をもつ

なかで、私たちがリアリティを確認する探求が導かれていく。つまり、ジェームズが実在について書くとき、彼は、私たちが事物を「リアルだ」と呼ぶプロセスについて記述しているのである<sup>24</sup>。

では、ジェームズは夢や幻についてはどのように考えるのだろうか。たとえば私たちが鋭いナイフをありありと目の前に思い浮かべたとする。そのナイフは十分はっきりとイメージされ、リアルな鋭さを持って経験される。その意味での実在／リアリティを私たち自身は否定することができないだろう。しかし、通常実在は、そのナイフが「そこにあり」、他の対象と関係して、ある特定の結果をもたらすことによって検証される。想像されたナイフの鋭さは本人にとってリアルなものであるが、それによって本物の木が切られることはない。ここでナイフは、物理的世界の名の下に精神的な経験からふるいにかけられ、経験のうちの安定的な部分としての位置を占めることになる。物理的世界の核となるのは、私たちの知覚経験であり、このような強固な経験が実在の核となっていくのである<sup>25</sup>。

それでも素朴実在論の反対者たちは、知覚されたものが夢や幻かどうかについて決定的に知る知識の基盤がないままに実在を確認することはできないと批判するかもしれない。しかし、ジェームズのプラグマティックな真理観に基づけば、必ずしも知識や実在を統合されたもの（unity）として考える必要はない。むしろ、何が実在であるのかについての疑問は実践のなかで応えられるべきものであり、実在の経験は多元的なものと考えることができるのだ。目の前に見えているものが幻かどうかを確かめたければ、ほかの人にそれを見てもらえばいいし、一人のときならば写真をとってみればいい<sup>26</sup>。一方精神分析家にとってみれば、幻は臨床的リアリティをもつものかもしれない<sup>27</sup>。真理や知識といったものは、私たちの生活の文脈と切り離すことができない。私たちは統合的で普遍的な実在を共有しているのではなく、共通の実在の аспекトに接しながら、その確認へ向けて探求していく過程を生きているのである。

### 3. 自然実在論とギブソンの知覚理論

パトナムがジェームズを継承して主張する自然実在論に基づけば、私たちは共通の世界をもつ一方、それを多様な仕方で経験している。私とあなたがともに見ている対象は、共通の対象であるが、それぞれが見ているアスペクトは異なっている。「そこにあるもの」は異なる仕方で経験され、そのリアリティは、それぞ

れの経験が記述され、共有されていく中で検証され、変化していくものなのである。自然実在論の観点は、私たちが経験する世界が多様であると同時に、共有可能性に開かれたものであることを示唆している。

ギブソンのアフォーダンス理論は以上の自然実在論が提示する世界観と共通した部分を持っている。ギブソンのアフォーダンス概念を参照することで、「そこにあるもの」の価値についての問題を、保育実践上の問題として具体的に考察することが可能になる。以下では、まずアフォーダンス概念について概説し、自然実在論との共通点を明らかにする。さらに、アフォーダンス理論の観点から、環境の意味と価値の問題について触れ、「そこにあるもの」を知覚するという瞬間がもつ実践的意味について考察する。

#### 3.1 アフォーダンスと直接知覚論

アメリカの心理学者であるギブソンは、静的な網膜像を視覚の媒介物と想定してきた心理学が、人間の知覚についての十分な説明をすることができないことを批判し、私たちが環境に含まれる情報を直接知覚するという革新的な知覚理論を構築した。その中核にあるのが「アフォーダンス」の概念である。アフォーダンスとは、環境に存在し、動物に行為の可能性を提供する情報である<sup>28</sup>。たとえば、水平で、平坦で、十分な広がりを持ち、なおかつその材質が動物の体重に比して十分に堅い表面があれば、それは支える（support）というアフォーダンスを持つ。このような表面が人の膝ほどの高さの段差を持っていれば、それは座ることをアフォードするだろう。この表面が持つ、水平、平坦、広がり、堅さを物理学的な尺度で測定することも可能である。しかし、アフォーダンスとしては、これらの特性はその動物との関係で測定されなければならない<sup>29</sup>。つまり、アフォーダンスは環境に存在するが、動物と環境との相互依存的な関係が行為として結実することで記述可能になる特性なのである。

ギブソンの知覚理論の革新的な点は、情報を刺激によって生じるものと捉えるのではなく、生態学的な環境に存在し、能動的に選択されるものとして捉えた点にある。二元論に基づく哲学が自己と世界との間に媒介物を必要としたのと同様に、心理学は、物質的世界から与えられる刺激を人間の「心」が解釈することによって経験が生じると考えてきた。このような考え方に従えば「情報」とは、物的環境の刺激を感覚器官が読み取ることで生じるものであり、自己と環境の媒介物として捉えられる。しかし、このようなモデルは、

「情報」を解釈するシステムを必要とする点で、大きな問題を抱える。視覚像がどのように生じているかを説明するためには、脳のなかに情報（網膜像）を解釈する小人が必要とされ、その小人が視覚像を生じさせるためには、小人が小人自身の網膜像を解釈するさらに小さな小人を必要とする、というかたちで、トートロジーに陥ってしまうためである<sup>30</sup>。

そこで、ギブソンは情報を、動物との動的な関係の中で構造化され、経験されるものとして捉え直した。たとえば、私たちが部屋を歩きながら椅子を見るとき、私たちの目に映る光学的な配置（網膜像）は常に変化し流動しているが、私たちは椅子の形が変わっていないことも、椅子が同一のものであることも疑うことはない。このことを、脳が変化する刺激から同一性を解釈しているとするのでは説明がつかなくなってしまう。むしろ同一性の知覚は、私たちが生態学的な情報の配置の中に、相対的に不変な構造（不変項）を見出している想定することによって、説明できるようになるのである<sup>31</sup>。椅子から発せられる光学的な刺激は、無味乾燥なものではない。その面積、堅さ、表面の凹凸といった刺激情報の配列には「座ることができる」や「登ることができる」という構造（意味）が潜在している。そして、そのような構造の知覚が成立するかどうかは、自己の関心や身体能力との関係で決定されている。私たちは意味や価値が豊富に存在する環境を直接に知覚し、経験しながら生活しているのである。

### 3.2 環境に潜在する価値

ギブソンは、私たちが意味ある環境を直接に知覚し経験しているという理論は、「諸対象と諸事象から成る世界が存在する」あるいは「我々の感覚器官《senses》は、世界についての知識を与える」という素朴な確信を支持するものであると主張している<sup>32</sup>。アフォーダンスを知覚することは、私たちが環境の生態学的な意味や価値と直接関わりながら生きていることを示している<sup>33</sup>。そして、そのアフォーダンスそのものは不変であり、知覚されるべきものとして常にそこに存在するものである<sup>34</sup>。ギブソンはここで、素朴実在論の立場を再評価し、表象の媒介のない直接経験の立場を擁護している。

“意味や価値に満ちた世界は、知覚者の外側に存在する”<sup>35</sup>というギブソンの主張は、人間に先在する世界を認め、実在を統合されたもの（unity）として扱う、伝統的な実在論思想に基づくものであるかのようにも見える。しかし、ギブソンが知覚を「流れ」であ

り「終わらない」ものであると捉えている点に注意を向けるとき<sup>36</sup>、ギブソンの思想がもつ自然実在論的な側面、つまり実在への懐疑と同時に実在の同一性を拒否するプラグマティックな実在論としての可能性が見えてくるのである。

ギブソンは知覚を、単なる意識でなく、「気づくこと」であると述べる。そして、気づくこととしての知覚は、「経験」を所有することではなく、「事物を経験すること」であると述べている<sup>37</sup>。ギブソンが静的な網膜像を否定したことから明らかなように、私たちが経験する事物はとどまっていることがない。ギブソンにとって生態学的な事物は、流動する世界のなかで知覚されるものであり、経験もまた流れのなかにあるものとして捉えられる。

これはジェームズが、「連想的経験」<sup>38</sup>という概念で捉えたように、未来を予期し、後に続く経験によって検証される種類の経験である。たとえば、ジェームズは、ハーバード大学のメモリアル・ホールを、そこから歩いて10分のところにある自宅から想像するという例を挙げる。このとき、もしも想像上のホールがなんらかの形で、実際のホールとの接続をもつことができなかつた場合（他の人を実際にそのホールにつれていくことができない、イメージが実際のホールと違っていた場合など）、ジェームズがそのホールのことを思考していたことは否定されることになる。一方、もしジェームズがほかの人を実際にホールに連れていき、イメージに付随する感情や知識が、そのホールを説明することに接続したとすれば、ジェームズの観念は実在との関係に立ったということが出来る。実際の観点からすれば、このとき、ジェームズが思考していたものが、最終的に知覚したホールそのものであったということに不自然な点はない<sup>39</sup>。以上のような事例を考えてみる場合、ホールについての思考が真にホールそのものの思考であったことが確認されるのは、実際にジェームズがホールを知覚したときである。経験のリアリティは、知覚対象のもつ「逆向きの妥当性の力」によって確認される<sup>40</sup>。つまり、経験のリアリティは、推移のなかにある対象との連想的関係のなかで検証されていくものなのである。

経験を生の流れの中に置き直すとき、知覚もまた推移する世界との交渉のなかで修正されつづけていくことになる。「アフォーダンスそのものは不変であり、知覚されるべきものとしてそこに存在する」という命題は、私たちが知覚しうる共通の実在として「そこにあるもの」を認めつつ、そのアフォーダンスの全体性

に言及することが不可能であることを示している。「投げることができる」「つかむことができる」というリアリティは、それが実際にできたときに初めて確認されるものであり、そのような環境の意味や価値は潜在しているものなのである。私とあなたが同時に手を伸ばした水の入ったコップは、私たちにとって共通の实在である。しかし、私とその「飲むことができる」という価値を知覚したのに対し、あなたは「投げることができる」として知覚したのかもしれない。そのコップのリアリティが確認されるためには、経験の結果を待たなければならない。私たちは共通の实在の аспекトを知覚しているが、コップのすべてのアフォーダンスを知覚することはできない。共通の实在 (reality) は、その価値が実現 (realize) していくなかで、確認されていくのである<sup>41</sup>。

#### 4. 保育における「そこにあるもの」の価値

##### 4.1 経験世界の差異とアフォーダンスの共有

ここまでアフォーダンス概念を自然实在論の系譜に位置するものとして論じてきた。「私たちは实在の аспекトを知覚している」という自然实在論の命題は、私たちは世界をリアリティを持って知覚するが、それは实在の限られた一側面を知覚しているのだということの意味している。私たちが経験する世界はそれぞれが異なるリアリティをもつ。それと同時に、環境には私たちが共有しうる、共通の意味や価値が潜在しているのである。

このことを保育という文脈に照らすとき、子ども理解について新たな視点から考えていくことができる。特に、子どもが知覚しているアフォーダンスに注意を向けることは、子どもの経験世界を理解していく探求を導くものであると言えるだろう。子どもは、環境の多様なアフォーダンスを利用して生活している。小石をひたすら並べる子どももいれば、小石をひたすら水たまりに投げ込み続ける子どももいる。大人には普段利用されないアフォーダンスを見出し遊ぶ子どもは、そのなかでさまざまなリアリティをもつ環境を経験しているのだ。大人にとって理解しがたい行為のなかでも、子どもはそこに何らかの意味や価値を知覚している。そのとき私たちは、子ども独自の経験世界に注意を向け、それを尊重していく必要があるだろう。

さらに重要なのは、私たちが子どもたちとともに、そこにあるリアリティを共有しうるということである。そこにある石、そこにある葉は、私たちと子どもたちをともに取り巻いている实在である。私たちは、子

どもが独自の仕方では知覚する環境に関心をもつとき、その意味や価値を共有していく可能性を開くことができる。子どもがひたすら石を投げ込んでいる水たまりを私たちが覗き込むとき、水たまりに映った私たちの顔が石の波紋で変形しているのを見るかもしれない。子どもが利用しているアフォーダンスを共有するとき、そこに映る世界の面白さは、まるで優れたアート作品のように、私たちに新たなリアリティを開くだろう。私たちは環境の潜在する価値に気づき、新たな仕方では世界と関わっていくことによって変容していくのである。

知覚されたアフォーダンスは共通の实在のひとつの аспекトである。異なる仕方では環境と関わる子どもの姿を見て保育者が変容することもあれば、その逆もありうる。ギブソンは、「価値とは私的であるのと同じ程度に公的であり、社会的世界は環境を真に共有することに基づいている」<sup>42</sup>と述べた。保育という社会的世界においても、保育者は、環境を真に共有することで子どもたちの生きる世界に気づくこともできれば、環境を選ぶなかに子どもに伝えたい価値を込めることもできる。そこにある環境の未だ気づかれていない意味と価値を探求することは、私たちと子どもたちが、お互いが生きる世界について気づき、共に生きる世界を築いていく過程であるといえるのではないか。

##### 4.2 「そこにあるもの」の汲みつくせなさ

以上のように、保育を「そこにあるもの」のリアリティの共有へむけた探求として考えてみると、その探求を駆動しているのは、「そこにあるもの」の意味や価値を、私たちが汲みつくすことのできないという事実である。津守が述べるように、子どもが山を前にしているとき、それはもしかしたら山であるかも知れないが、山ではないかもしれない<sup>43</sup>。子どもがどのように環境に関わっているかは、常に新たな理解の可能性を残す。そこにある「山」の価値は、無限に探求することができるのだ。

そして、園庭の中や近隣の環境にも、気づかれていない価値は潜在している。園庭の木は保育者が縄をかけることで遊び場が変わるかもしれない。公園へ向かう途中の道端に咲いている花に子どもが気づくことで、保育者は散歩の新たな意義について気づかされるかもしれない。環境の価値が見いだされ共有される時には、それが小さなものであれ、お互いが生きる世界の変容が生じるのである。ありふれた／共通の (common) 環境に新たな価値を見出していくことは、生活のなか

の喜び、楽しみ、好奇心にも通じるものであろう。

このように保育を捉えるとき、環境の意味は保育者によって一様に固定できるものではないことが理解できる。保育にとって環境構成が重要なのは言うまでもないが、さらに重要なのは構成した環境が子どもにとってどのように経験されているかという事実である。いかに環境を熟知し、ねらい通りの環境構成が行えたとしても、環境の意味や価値は、異なる仕方で見いだされうる。そして、むしろそのことの内に、子どもの経験に寄り添っていく保育の奥深さがあるのではないか。

環境は、確かにそこに在るが、それは同時に汲みつくすことのできないものとして存在している。そのことによって環境は、子どもの経験世界と保育者の経験世界をつなぐメディアとなっているのである。

#### 註

- 1 津守真、『子どもの世界をどうみるか——行為とその意味』、日本放送出版協会、1987年、9頁。
- 2 森上史朗、『幼児教育への招待——いま子どもと保育が面白い』、ミネルヴァ書房、1998年、15頁。
- 3 Putnam, H. (1999). *The Threefold Cord Mind, Body, and World*. New York: Columbia University Press. (野本和幸監訳、関口浩喜・渡辺大地・入江さつき・岩沢宏和訳、『心・身体・世界——三つ撚りの綱／自然な実在論』、法政大学出版局、2005年)
- 4 Gibson, J. J., (1979). *The Ecological Approach to Visual Perception*. Boston: Houghton Mifflin Company. (古崎敬・古崎愛子・辻敬一郎・村瀬旻訳、『生態学的視覚論——ヒトの知覚世界を探る』、サイエンス社、1985年)
- 5 この点についてパトナムは、「世界の喪失」という問題の解決が「行為 (action)」の中に見出されるべきであるというプラグマティズムの立場へのコミットメントを示している [Putnam, H. (1995). *Pragmatism: An Open Question*. Cambridge: Blackwell. p. 74 (高頭直樹 (訳)、『プラグマティズム——限りなき探究』、晃洋書房、2013年)]
- 6 Putnam, H. (1995). p. 20
- 7 Putnam, H. (1999). p. 4
- 8 パトナムはこのことを数学のスコールム・パラドックスを例に論証している (Ibid. p. 16)
- 9 Ibid. p.12
- 10 その代表的なものが、意識のクオリアをめぐる議

論である。

- 11 ここでパトナムは、「外部の事物を知覚することが直接に主観的経験を引きおこす」と説明する安易な直接知覚論と、自らの自然実在論の立場を区別している。外部の事物は主観的経験を因果的に引きおこすのではなく、ここで因果モデルを導入すること自体が疑似問題をつくり出すのである (Ibid. p. 10)
- 12 Ibid. p.25
- 13 Ibid. p.28
- 14 Putnam, H. (1990). *Realism with a Human Face*. Cambridge: Harvard University Press. p. 246
- 15 「あなたの精神の存在」を信じることは、ジェームズにとって多元的生を信じる理性と直結する。「わたしはなぜあなたの精神の存在を想定するのであろうか。その理由は、あなたの身体がある特定の仕方運動することを見るからである。その身振り、顔面の動き、言葉、仕種一般が「表現的」であることから、わたしはそれがわたしと同じような内的生によって、自分と同じように活性化されていると考える。類推によるこの議論は、それ以前に本能的信念が働いているか否かを問わず、わたしがあなたの精神の存在を信じる理由 (reason) である。」[W. ジェームズ、伊藤邦武 (編訳)、『純粹経験の哲学』、岩波書店、2004年、82頁。(James, W. (1912). *Essays in Radical Empiricism*. New York: Longmans.)]
- 16 「われわれの精神は実際の観点からして、さまざまな対象が共有しているひとつの世界において互いに出会っており、この世界はいずれかの精神が消滅したとしても、依然としてそこに存在していることになる。」(前掲書、84頁)。
- 17 前掲書、82頁。
- 18 Putnam, H. (1999). p. 41
- 19 Putnam, H. (1999). p. 10
- 20 「すべてわれわれの真理は「実在」についての信念である。だからどのような特殊な信念においても、実在は、独立な何物かとして、製作されたものでなく、見出されたものとして、働いている」[W. ジェームズ、榊田啓三郎 (訳)、『プラグマティズム』、岩波書店、1957年、243頁。(James, W. (1907). *Pragmatism*. New York: Longmans.)]
- 21 Putnam, H. (1999). p. 9
- 22 Putnam, H. (1995). p. 20

- 23 Putnam, H. (1990). p. 242
- 24 Putnam, H. (1990). p. 247
- 25 W. ジェームズ、2004年、40頁。
- 26 Putnam, H. (1990). p. 247
- 27 Putnam, H. (1990). p. 241
- 28 Gibson, J. J., (1979). p. 127
- 29 J. J. ギブソン、境敦史・河野哲也訳、『ギブソン心理学論集——直接知覚論の根拠』、勁草書房、2004年、341頁。(Gibson, J. J. (1982). *Reasons for realism* London: Lawrence Erlbaum.)
- 30 Gibson, J. J., (1979). p. 60
- 31 ギブソンは、私たちが変化と不変を同時に経験できるのだとの述べる。(Ibid. p. 253)
- 32 J. J. ギブソン、2004年、311頁。
- 33 Gibson, J. J., (1979). p. 140
- 34 Ibid. p. 138-139
- 35 Ibid. p. 127
- 36 ギブソンはここでジェームズの心理学の影響について自ら言及している (Ibid. p. 240)。
- 37 Ibid. p. 239
- 38 W. ジェームズ、2004年、50頁。
- 39 前掲書、62頁。
- 40 前掲書、72頁。
- 41 リードは、行為を環境の価値の実現として捉えることについて詳細な議論を展開している [Reed, E. S. (1996). *Encountering the World: Toward an Ecological Psychology*. Oxford University Press. (細田直哉 (訳)、佐々木正人 (監修)、『アフオーダンスの心理学—生態心理学への道』、新曜社、2000年)]
- 42 Reed, E. S. (1988). *James J. Gibson and the Psychology of Perception*. London: Yale University Press. (佐々木正人 (監訳)、柴田崇・高橋綾 (訳)、『伝記ジェームズ・ギブソン—知覚理論の革命』、勁草書房、2006年、2頁。)
- 43 津守真・本田和子・松井とし・浜口順子、『人間現象としての保育研究 (増補版)』、光生館、1999年、56頁。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 26381083 の助成を受けたものです。

## Values of ‘Things out There’ in Early Childhood Education and Care: An Interpretation of Affordance Theory as Natural Realism

Faculty of Child Sciences, Department of Child Sciences  
Issei YAMAMOTO

### Abstract

This paper answers the question whether it is possible for preschool teachers to share their experiential world with children from the perspective of natural realism. The problem of perception is explored to connect a philosophical perspective with practical issues. Through an interpretation of affordance theory as natural realism, in this paper, I shall clarify that the reality of ‘things out there’ is perceived directly during the process of collaborative verification. The common reality of ‘things out there’ is shared, but each of us experiences it in different ways. We can understand each other by sharing experiential worlds through our common reality, which leads to the individual’s transformation. In this light, the meanings and values of our environment are shareable but infinite; therefore they cannot be perceived completely. In conclusion, I shall discuss the possibility of inquiring into children’s experiential worlds by paying attention to affordances, which children perceive in their own way.

Keywords: affordance theory, natural realism, environment, experiential world, value